

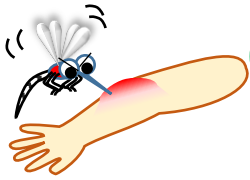
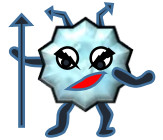
7月のほけんだより

平成30年 212号

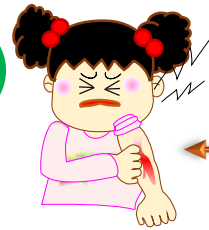
呉市役所
子育て施設課
0823-25-3144

★ 夏に注意する皮膚の病気 ★

暑くなってくると汗をたくさんかくようになります。また、細菌やかびなども増えやすくなることから、皮膚のトラブルが増えてきます。今回は子どもに多い皮膚の病気をいくつか紹介します。



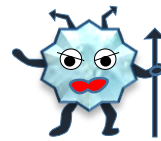
でんせんせいのうかしん とびひ（伝染性膿痂疹）



とびひって・・・

虫さされや湿疹などのかゆいところがあると、そこをひっかいて傷ができます。ふつう皮膚の表面にはブドウ球菌というばい菌（菌）がくっついていて、傷から出てきた汁がその栄養となります。夏は気温が高いので、菌が増える条件がそろうため、その数が爆発的に増えます。その増えた菌から毒が出てきて、正常な皮膚をとかし、水ぶくれができてきます。その中にはたくさん菌がいるため、水ぶくれの中の汁がほかの場所や、ほかの子どもに付くと、同じような症状を起こし、次々と広がっていくため『とびひ』と言われます。

治療は・・・



治療は抗生剤の飲み薬と、塗り薬が基本となりますが、かゆいことが多いためステロイドの塗り薬を一緒に使うことが多いです。昔は傷があるときにはお風呂に入るのを禁止していましたが、最近では逆にお風呂に入って傷を洗い、その場所にいる菌を洗い流すほうが良いことがわかってきたため、お風呂には普通に入ってもらえるようになりました。ただし、きょうだいで一緒に入ると、うつることがあるので、別々に入った方が良いでしょう。また、タオルなども同じものは使わないようにしましょう。



でんせんせいなんぞくしゅ みずいぼ（伝染性軟属腫）

みずいぼって・・・

ごま粒から米粒の半分くらいまでの小さなぶつぶつができます。ぶつぶつの中央は少し白っぽく見える部分があり、つぶすと白い小さな固まりが出てきます。この固まりの中にたくさんのウイルスが入っています。



治療は・・・

治療の基本はピンセットなどでつまんで取ってしまうことです。その際に痛みを伴うことや、自然に治ってしまう子どももいることから、治療しなくてもよいという考え方があります。ただし、全身に広がったり、ばい菌がついて赤くなったり、きょうだいや友達にもうつることもかなりあります。

治療をしないことを選ぶ場合には、どれだけ広がっても、赤くなってもかまわないという強い意志を持つことが必要です。数が少なければ取ることも比較的簡単ですが、増えてから取るのは、取られる子どもの苦痛が大きくなります。最近ではピンセットで取る前に麻酔のテープを1時間くらい前に貼り付けておくことで、かなり痛みをおさえることができるようになりました。数が少ないうちでしたら短時間で治療は終わりますから、子どもの負担も少なく済みます。治療を希望するときはできるだけ少ないうちに始めましょう。

はくせん みずむし（白癬）

みずむしって・・・

みずむしは白癬菌というかびの一種の感染症です。かびは暖かく湿ったところで育ちやすいので、みずむしも暖かい時期に悪くなります。

足の指の間や、足の裏などの皮がうすくむけてきた場合、足白癬（みずむし）の可能性がります。

ただ、子どもの場合多くは、汗の腺がつまって小さな水ぶくれができ、それが自然にやぶれて、皮がめくれてしまう『汗疱（かんぽう）』という病気があり、見た目だけではどちらの病気か判断ができないため、めくれた皮膚を顕微鏡で調べる必要があります。

治療は・・・

みずむしだと思ってあわてて薬を塗ると、みずむしか汗疱かの判断ができなくなることもあるので、できれば薬を塗らずに受診してください。

また、子どもの場合は足よりも、体や頭などにみずむしの菌がうつることが多く、表面がガサガサした丸い、わっかをかいたような赤～薄茶色のぶつができてきます。動物のみずむしの菌が、ヒトにうつることも時々あり、最近増えてきています。普通のみずむしの菌よりひどくなりやすく、強めの治療が必要なこともあります。特にノラ猫にその菌がついていることが多く、猫を触ったあとにかゆくて赤いぶつができてきたようなときには、できるだけ早く受診しましょう。

薬を塗らずに受診



ほけんだよりは、くれ子育てねっとの子育て支援サービスでもご覧になることができます。

URL <http://www.kure-kosodate.com/>